

---

# アラビアドリーム～砂漠に咲いた一輪の薔薇～

淡雪ぼたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アラビアンドリーム〜砂漠に咲いた一輪の薔薇〜

### 【Nコード】

N6154T

### 【作者名】

淡雪ぼたん

### 【あらすじ】

ミュージカル俳優を目指す、音大3年生の加賀野由奈かかのゆなは、難病にかかり、自分の命の終りを身近に感じ始めていた。そして死ぬ前に一目見ておきたいと、中東の小国を訪れ、その国の王に妻にと望まれる……。《携帯創作小説サイト フォレストより引っ越して来ました。》

## 第1話 囚われた一輪の薔薇（前書き）

### ご注意

この物語は架空の物語で、地域、場所、国名などは実際には存在致しません。

又、イスラム圏の文化や風習等、実際の物とは異なる点など多いかと思いますが、夢物語と読んでご了承下さい。

ストーリーの中にテロリストとの残酷なシーンや、血の要素の含まれる文面がございます。苦手な方はご注意ください。

## 第1話 囚われた一輪の薔薇

中東の西アジア付近に、日本人には馴染が薄いが、小国ながら石油などの天然資源や、レアメタル（希少金属）、ダイヤモンドなどの質のいい宝石原石の鉱床などの採掘と輸出で莫大な財をなし発展した、エルラバドス王国と言う国があった。

この国を治める王は、アシュラフ・ラシード・ラビブ・エルラバドス。

30歳で緩いウェーブのかかった漆黒の髪に、漆黒の目．．．。中東人らしい褐色の肌に、背が非常に高く大柄で、筋肉質の引き締まった美しい体に、血統のよさを感じさせる美しく整った顔立ち．．．。

その場に居るだけで威圧されそうな、非常に存在感があり、冷ややかにクールな瞳は、睨まれたら萎縮してしまいそうな眼力があった。砂漠の地には水源が死活問題となるが、その国には一度も枯れる事なく、大量に懇懇と美しく澄んだ清らかな水が湧き続ける大きなオアシスがあり、国を潤し発展させてきた。そのすぐ近くに、さほど高くはないが、山々がそびえ立ち、山頂から流れ出ずる川がオアシスに流れ込み、国の発展をさらに支えてきた。

その山々のひとつに、バドニーヤ山と言う山があり、『アラドオリウス（幻想の滝）』と呼ばれる美しい滝があった。

その周辺に1年中雨を降らし、輝く虹の橋がかかり、まるでこの世のものでないような美しい風景であった。

だが、この山は聖山とされて、なかなか容易には立ち入る事は出来

ない。

\* \* \* \* \*

由奈は、広大なサハラ砂漠を走るツーリストバスの車窓から、美しく広大に広がる砂漠の風紋をぼんやりと見ていた。

目は風景を見ているが心はここにあらず、自分の身に起こった様々な事を、走馬灯のように一つ一つ思い起こしていた。

音大で声楽の勉強をして、学校外ではダンスの練習に明け暮れてミュージカル俳優を目指し、数カ月前までは希望と夢にあふれていた。。。

1年前の大学2年の春、体が怠い．．．ちよつとした怪我で出血するとなかなか血が止まらなくておかしいと思い、病院に行ったら、原因不明の血液の難病だと言う事が分かった。

物凄くショックだったが、いい薬もあるしきつと完治できると信じ、夢を諦めずに頑張り続けてきた．．．。

1カ月前に、血液検査の数値が悪くなってる事、新しく変えた薬が効かなくなったら、もう使える薬が無い事を宣告された。

まるで死の宣告を受けたようだった．．．。

丁度ずつとお世話になった主治医の先生が、アメリカの大学に先進医療を学びに行かれるとの事で病院を去る事になり、凄くショックで不安定な気持ちでいた。

大きな病を抱えている患者にとって、信頼出来る主治医の先生は神様の様な心の拠所のような大きな存在だ。

その先生が病院から去られると知って、凄く見捨てられてしまったような淋しい気持ちでいた所に、新しい主治医の先生と悪い検査結果の数値．．．。まるでダブルパンチのような気持ちだった。

新しい主治医の先生も、前にお世話になっていた先生の後任で、優秀で腕の方は確かな先生のようにだったが、前の先生が40代の落ち着いた年齢に比べて今度の先生は30代前半と若く、まだ人生経験も乏しく、由奈の心のケアまでは気配りのいかない先生で、信頼関係が築ける感じでもなかった。

その状況で、「今度の薬が効かなくなったら非常に厳しい状況になるかもしれませんが」なんて坦々とした表情で言われたので、その衝撃は大きかった。

由奈の微妙な表情と心理状態に気付いて、慌ててフォローするような事を後から一生懸命言っていたが……。

「日進月歩医学は進歩していますから、近い将来きつと新しい薬が見つかると思いますから……今の治療を頑張ってくださいよう……」

由奈にとっては気休めにしか聞えなかった。

薬の認可には膨大なデータと、認可までかなりの時間を要する……。

この状況で間に合うようには思えない……。

死の恐怖は計り知れない……。

自分以外誰も分からない本当の痛み苦しみ……その心の中は、家族にも分かることはできない……。

昼間でも夜でもその恐怖からは逃れられない……。

特に夜はつまらない事ばかり頭の中を駆け巡り、眠れない日々……夜遅くまでぼんやりネットをする日々……。

そんな時に、偶然ネットサーフィンして見つけた『アラドオリウス（幻想の滝）』……。

エルラバドス王国の政府観光局のページだった。王の許可を得て、たった一枚だけ公開した画像だそうだ……。

今まで見た事のない、まるでこの世の者と思えない美しく幻想的な場所だった。

王族と神官意外は立ち入れない場所だそうだが、せめて近くに行ってみたい……。

……もしこの先希望がないのなら、自分に残された時間が残り少なくなっているのなら、行ってみたい。

一目この目で見たい……。病状が悪化して、ベッドに括りつけられる状況になる前に……。動けるうちに……。

海外旅行初心者なので、個人旅行は難しいと思い、最大手とは言えないツーリスト社だったが、旅行日程に『エルラバドス王国』があり、宿泊宿が『バドニーヤ山』近くのオアシスのすぐ側だったので、即決で申し込んだ。

両親には反対された……。

でも、私の気持ちを汲んでくれて、泣く泣く送り出してくれた。

旅費も援助してくれて……。

本当に心から感謝している……。

「寝たきりになる前に……。やりたい事をやらせて!!」の一言が効いたようだ。

こんな事言っただけで心配かけちゃって……。心の中では何度も両親に謝った……。だけど、心の拠所が欲しかった……。

この先どんな恐ろしい事が待ち受けても、恐れずに深い闇に耐えられるような希望のような光がひとつ……。

今の私の心は真っ暗で……。何も見えないから……。

ふと……。現実に戻って、砂漠の美しい風景が心に飛び込んできた。そうだ今……。私は向ってるんだ……。あの場所に……。

今はバスで、エルラバドス王国に向っている所だ．．．。  
あと十数キロ走ったら、エルラバドス自治区の安全地域に  
入るが、その手前は少し危険区域．．．。  
でも、バスの車窓から見える風景は穏やかで、危険など微塵も感じ  
ない。  
どのぐらいの時間走ったろうか？  
流ちょうな英語を喋る、髭を生やした典型的なアラブ人と言う雰囲気  
のガイドさんが、マイクを持ってアナウンスし始めた。

「皆さんあと5キロ程で、エルラバドス自治区に到着致します。そ  
こで30分程休憩して、今日の宿泊宿まで参りたいと思います」

そのアナウンスを聞いて『ウワァーッ!!』という喜びの歓声が上が  
った。

このツアーには日本人は私と、バックパッカーっぽい男性が数人．．

あとはヨーロッパ人やアメリカ人など．．．。

日本人女性1人旅と言うのは珍しいと言うか、無謀な感じのようで、  
入れ替わり立ち替わり、色々声をかけてきてくれたり、差し入れを  
くれたりして、和気あいあいとした雰囲気だった。

．．．その時だった．．．。

バスが慌てて急ブレーキを踏んだので、皆つんのめりそうになった。

機関銃を持った、テロリスト風の一軍に囲まれた．．．。

運転手と、テロリストの代表とが何やら交渉している様な雰囲気だ  
った．．．。

1人のパニックになった年配の外国人男性が、バスの窓から降りて  
逃げようとして、いきなり射殺された。

先程の和気あいあいとした雰囲気は一転．．．。  
皆悲鳴を上げたりパニック状態だった．．．。

バスの運転手がアクセル全開にして、急発進した．．．。  
ロケットランチャー弾のような物が打ち込まれ、バスのタイヤがパンクし、バスがゴロゴロ横転した．．．。

由奈も自分の体がどうなってるのかも分からない状況で、バスと一緒にグルグル回転してしまい、あちこち体がぶつかって気を失った．．．。  
物凄い恐怖だった．．．。死ぬ時の恐怖ってこんな感じなのかな？  
ふとそう思った．．．。

\* \* \* \* \*

しばらくして意識を取り戻したが、バスの中はグチャグチャに荷物が散乱して、砂ぼこりと火薬の匂いがもうもうとして、回りがよく見えない状況だった．．．。

体中が痛い．．．。

側でうめき声が聞えて来る．．．。

しばらくして、だんだん回りの様子が見えて来たが、背筋が凍りついた。

恐ろしい事に、そのテロリスト達が、銃で怪我をした人1人1人確認しながら射殺しているのだ。

由奈は小柄で椅子の下に体が隠れて、死角になっていて、まだ見つかっていないが、見つけられるのは時間の問題と言う感じがした。

病気で死を身近に感じてきたが、それでも恐ろしい．．．。  
こんな死に方は嫌だ．．．。

平和な日本で暮らして平和ボケしてきて、一步国を出るとこんな恐ろしい現実が身の回りで起きてるんだと改めて実感した。

．．．．．そして物凄く後悔した。

本当に恐ろしくて．．．気が変になってしまいそうだった．．．。

皆射殺されてしまったのか？

シーンとして、誰の声もない．．．。

ただテロリスト達の話し声だけが聞えて来る．．．。

そして、横転したバスの窓から出入りし、中をゴソゴソ物色して金目の物をあさってる感じだった．．．。

由奈の所までやって来て、倒れた椅子を持ち上げられて、見つかってしまった．．．。

恐ろしいテロリストの死に神のような冷やかな目と、由奈の脅える目があった．．．。

銃口が自分の方に向けて狙ってるのが分かった．．．。

．．．．．もうダメ．．．。

お腹と手にグツと力が入り、身を固くした。

その時だった．．．。

激しい銃撃戦が始まり、由奈を狙っていた銃口は、銃撃戦の方に向けられて、やがてその男はバスの窓から外に出ていった．．．。

ピュンピュンと、自分の側で銃弾がかすめていく感じが分かった．．．。

しばらく激しい銃撃戦の後、静かになった．．．。

今度は何？

次に何が起きるのだろうかと考えると、恐怖で体が凍りつく。さつきとは別のテロリストだろうか？

先程とは別の組織の一員らしい男が、バスの中を物色し始め、すぐに見つけられてしまい、他の人に連絡していた。

身なりは先程のテロリストとは違い、キチンとしてるし、きちっとした雰囲気の人に見えた。

．．．．．ただど．．．私．．．射殺されちゃうのかな？

バスの中から引つ張り出されて、銃口を向けられ、手を後ろで縛られた。

ウエストポーチを取り上げられて、バッグの中を細かく点検された。パスポートを広げて、懸命に確認している．．．。

それから、銃口を向けられながらジープに乗せられて、テントの張つてある居留地に連れて行かれた．．．。

銃口を向けてる見張りの男は、私のラフな格好を見て、怪訝そうな顔をして、頭から足下まで隠れる大きな黒いベールをかぶせてきた。イスラム圏では、女性は体を見せてはいけない．．．。外ではかぶるようになっていたが、外国人オンリーのツーリストバスの中だったので、ラフな格好をしていた．．．。

大きな立派なテントの前に連れて来られて、銃口を向けられ、中に入れと言うジェスチャーをされて、由奈は恐る恐る中に入った。

中は立派な敷物が敷いてあり、美しい高価な生地の内天張りが張り巡らされており、中央に玉座のような立派な椅子が置かれていて、黒ずくめのカンドーラをまとい、ゴトラををかぶった、大柄の位の高そうな男性が座っていた。

「……なんて綺麗な気品のある顔立ちの人なんだろう……」

その男の前にひざまずかされた。

その男性が合図して、後ろ手に縛られていた縄は解かれ、顔を見せる為に頭からすっぽりかぶっていた黒いベールが取り払われた。

その一瞬、玉座に座っている男性の焼けつくような強い視線を感じ、その視線に耐えられなくて小さくなって俯いた。

側には通訳のような側近が立っていた。

「私達は、この一帯を警護する、警護団の者です。

あなたは何処から来ましたか？」

その側近が流ちょうな英語で話した。

「日本です」

「……警護団の人なの？」

「名前は？」

「加賀野 由奈です」

「何をしに来ましたか？」

「観光で……。一目……バドニーヤ山の『アラドオリウス（幻

想の滝」が見たくて．．．立ち入れない事は良く分かってますが、せめてその近くのオアシスに行って見たくて．．．エルラバドス国に行こうとしてました」

その時、玉座に座っていた男性が興味を示し、体を起こして由奈をじっと見据えた。

その視線に息苦しいような、気持ちの落ち着かない感覚を感じた．．．  
。。  
なんて威圧感があつて．．．凄い人なんだろう．．．。

「バドーニヤ山は聖山．．．エルラバドス王族の者以外立ち入る事は出来ぬ。また、山のほとりに近付いても『アラドオリウス（幻想の滝）』は見えぬ」

その男がいきなり流ちょうな英語を話し始め、驚いた。  
地に轟くような低く力強い透き通る声だった。

それは地の底の赤く燃える溶岩のような雄々しさと、命を育む肥沃な大地のような果てしない力と．．．ほんのり温かさを感じた。

「そうですか．．．あの．．．私は開放して頂けるのでしょうか？」

「ここでそなたを開放したら命はないであろう．．．」

「えっ？」

その意外な言葉に驚いて、その男の瞳の中を探るようにジッと見つめた。

「ここは強盗団やテロリスト達の巢窟．．．。この自治区居留地を出たら、すぐに襲われて命はないであろうな．．．」

「あの．．．あなたは？」

「この方は、エルラバドス王国の王、アシュラフ・ラシード・ラビブ・エルラバドス様だ」  
警護団のものが畏敬いけいの念を払って、深々と頭を下げた。

「ええっ？」

「今日は、国近辺の無法地区を警備する、エルラバドス自警団居留地の査察に来られたのだ」

「・・・この方が、アシュラフ王・・・」。

「この中は安全だ。明日、エルラバドスに案内いたそう・・・ゆるりと滞在するがよい」

「あ・・・ありがとうございます」

「そうそう・・・そなたが『アラドオリウス（幻想の滝）』を見れる方法がただ一つある・・・」

「それは？」

「我が妻となり、王族の一員となればな・・・」

「ええっ!!」

（第2話に続く）

## 第2話 麗しの漆黒の瞳の王

「……我が妻となり、王族となれば……。  
バドーニヤ山に入る事が出来て、『アラドオリウス（幻想の滝）』  
を見れるですって?!」

「そんなのきつと嘘……。  
私をからかっているんだわ……。」

「ただのお戯れですよね? 『アラドオリウス（幻想の滝）』を是非見て見たいとますが、無理のようですので諦めます……。」

「その程度の気持ちならば、見ずに帰った方が良からう……。」

「……アシユラフ王の冷やかな笑と、その言葉が心に突き刺さった……。」

「もし……私が妻になりますと言ったら、本当に見せて下さるのですか?」

「妻になれたらな……。」

「……その気もないくせに!! やはり、おからかいになっているのだわ……。」

「あなたのような立派な方が、私のような異国の娘を妻に迎えるはずがありません……。貴国を観光するだけで、諦めて帰ろうと思います」

「先程までおどしていた由奈はそこには居なかった……。  
王の戯れのような言葉に、酷く自尊心を傷つけられたような気持ち

になり、強い目で真っ直ぐ王を見つめた。

長いまつ毛に、これ以上のものはないと言っぐらい整った綺麗な王の瞳……。

何故だか心がスーッと吸い込まれそうな気持ちになった……。

「それがよかろう……。

だが……もし妻として身を捧げる気が起きたらいつでも余の元に  
来い」

何故何度もそのような事をおっしゃるのですか？私の心を試している  
ような……。

「は……い」

今のはいったいなんだっただろう……一瞬心が吸い込まれそう  
な囚われたような気持ちになった……。

魂が共鳴しあったような、今まで感じた事のない凄く不思議な感覚  
だった……。

いけない、いけない……。

この王の言葉を真に受けて、妻になる事を望んだら馬鹿を見そうだ  
……。

こんな異国の何処の馬の骨とも分からない娘を妻にするはずがない。  
一夜の慰み者にされて、捨てられるか、もしかしたら殺されてしま  
うかも……。

「では、お腹もすいておろつ……。ゆるりとするが良い。明日、  
エルラバドス王国に案内いたす」

「はい……。ありがとうございます」

王のテントを出て、警備兵に案内されて、ツーリストバスから運ん  
で来た荷物の置かれている場所へと連れて来られて、自分の荷物を

捜した。

スーツケースは砂ばかりにまみれて傷だらけだったけれど、無くなりもせずに見つかってホッとした。

この中に1カ月分の飲み薬が入ってる．．．。

今はまだこの薬が効いていて、症状が治まっている．．．。

幸いに擦り傷ぐらいで怪我也無く澄んだ．．．。

でも、他の人達は？

「あの．．．このバスに乗っていた他の方達は？」

その兵士は思い表情で顔をしかめ首を振った。

．．．．私1人助かったの？ 背筋が寒くなった．．．。

見れば、荷物が置かれているその先の方に、白い布を被された遺体が並べられていた。

和気あいあいとした車内での乗客の笑顔．．．。ほんの数時間旅を共にしただけだけれど、すごく心が痛んだ。

生き残った者が私一人なんて．．．信じられない．．．。私もこの中の一人であつたかも知れないのだ。

奇跡としか思えなかった．．．。

そつと手を合わせて黙禱を捧げた。

「あの．．．日本大使館に連絡は？ 日本の両親にも連絡させて欲しいのですが．．．。」

大使館の方にはすでに連絡が行っていた。

詳細なども伝えられていたようで、大使館員と電話で一言三言話しただけで済んだ。

それから電話を借りて、両親に無事を伝えた。  
物凄い剣幕で、『戻って来い!!』ときつく言われたが、怪我も無  
かった為そのまましばらく滞在する事を伝えた。

アシユラフ王の御好意で、エルラバドス王国にしばらく滞在させて  
いただけることになって、更に案内までしてくれると言っただけだ。  
もしかしたらもう二度とここには来れないかもしれない。だから  
時間の許す限り見てみたいし、滞在したかった。

あんな惨劇があつたのに、日本に帰ろうと思わずに滞在を続けたい  
と思つたのは何故だろう？

この国はまるで幻のような。不思議な国だ。  
そして帰りたく無いと思わせる魅力があり、その誘惑に勝てなかつ  
た。

\*\*\*\*\*

夜、豪華な王の寝所のテントの中。

幾重にも重なった薄地の布の天蓋のついた、美しい金の細工の施さ  
れたベットに横たわり、アシユラフ王はあの娘の事を考えていた。

はらりと黒いベールが取り払われ現れた、神秘的な東洋の娘。  
日本と言えば日の出する国とも言われ。黄金の国とも言われた  
神秘的な国だ。

それにここよりかなり遠くにある国。一人で良くここまで  
やって来たものだ。

初めてその娘を見た時、何故か心臓がドクンと波打った。  
アラブ女性のように豊満ではなく、小柄で壊れてしまいそうな線の

細さ．．．。

ほんのりと赤みのある白い肌．．．果てしなく澄んでいるけれど、その瞳はどこまでも悲しみを秘めているように果てしなく碧かった．．．東洋人らしい濃い茶系の瞳なのに．．．なんであんなに碧く感じたのだろうか？

大きな瞳に長いまつ毛．．．。そのまつ毛は蝶が羽を休めるように、瞬きする度に、優雅にフワリフワリとし、まるで東洋人の優雅な舞いのように美しかった。

アラブ人のように固く波打つ髪ではなく、柔らかでつややかなサラサラの髪の毛．．．。そつと抱き寄せて、この手で優しく梳いてみたい衝動に駆られた。

今にも壊れてしまいそうで、この腕に優しく包み込んで守りたいよ  
うな．．．。

そんな儂い感じの乙女なのに、あの瞳で力を込めて真っ直ぐ余を見つめてきた．．．。

「余が目を合わすと大抵の者は目を反らし．．．おどおどするものを．．．気の強い娘だ．．．」

ふと、幼き頃亡くなった母上の言葉を思い出した。

．．．．．愛とは不思議なものです．．．。真の魂で通じ合っているお方と巡り合ったならば、

一瞬、目と目を見交わしたただだけで、心は波打ち．．．その瞳に囚われて心をさらわれてしまうのです。

私はその方と出会い、愛の証としてそなたが生まれたのです。

．．．．．あれは亡き父王の事だ．．．。

不本意にも左大臣の謀略により、第2夫人と言う地位にあらせられたが、父王の寵愛を一身に受けて幸せそうだった．．．。

あの娘を思い浮かべたら、ザワザワと心が騒めいた……。あの娘を我が物にしたい衝動に駆られた。

\* \* \* \* \*

翌日由奈は、食事と支度を終えて、美しい衣装と真っ黒なアバヤを渡され、それを着て、大型ジープに乗るように言われた。アバヤを着ると、美しい衣装も隠れて黒一色、地味な雰囲気だ。少しだけ足下の裾の方から美しいドレスがチラチラと見える。

ジープに案内されて乗ろうとしたら、アシユラフ王がすでに乗っており、とても驚いた。

「……王の隣に座るの？」

ドキドキしながら、王の隣に座った。

「おはようございます。何かから何までお世話になりました。ありがとうございました」

何の香りなのだろう、王からはほのかに優雅で芳しい香りがした。

「昨晚はゆっくり休めたか？」

「はい。お陰様で、疲れをとる事ができました」

「今日はエルラバドスの名所を案内いたそう……」

「ありがとうございます」

大型ジープは、王の専用車と言っただけあって、内装が豪華で、窓ガラスは防弾硝子のようだった……。

ロケットランチャーのような物で襲撃してくるテロにも対処出来る、  
剛健な特殊仕様の車のようだ。  
前後に数台の護衛の車が付き、ジープは走りだした。

一見恐そうな威圧感のある、そして神々しいカリスマ性のあるアシ  
ユラフ王……。  
チラと見る横顔が彫りが深くて、計算され尽くしたように美しく整  
った気品ある顔立ちで、隣にいると思っただけで心が時めく様な気  
持ちになって来る……。

……そう言えば昨夜は久しぶりによく眠れた……。  
いつも心の片隅のどこかで、病への不安が重くのしかかり、一瞬で  
も忘れてたりする事は無かったのに……。  
特に静かな夜は、不安で押しつぶされそうになって、なかなか寝つ  
かれず時に枕を濡らしたり……。  
なのに昨日は……なぜなのだろう……王の側にいると心が落ち  
着く……。

「そなたの事が聞きたい」  
突然王から話しかけられて、ちょっとドキッと心が高鳴った。

「はい……」

「学生だそうだが何を学んでおるのか？」

「はい。ミュージカル俳優になりたくて、音大で声楽の勉強をして  
おります。それ以外にダンスも学んでおります」

「ほう。是非披露してもらいたい……」

「いえ．．．。そんな大した物では．．．」

「今度は是非見せてくれ」

「はい．．．」

色々お世話になってるし、しつこく断るのも良くないと思い、つい『はい』と言ってしまった．．．。

王の前で歌ったり踊ったりするなんて．．．緊張してしまつて想像しただけで恐ろしい．．．。

それから沈黙が続いて、何となく落ち着かない．．．。

小心者の私と違って、アシュラフ王の何と堂々とした事が．．．。いつも沢山の家臣や民衆から見られてて、注目される事にも慣れるだろうし、王の中の王と言う感じで、神々しい．．．。

「ほら見て見ろ！ この国に潤いをもたらすオアシスだ．．．」

王が窓の外のに広がるオアシスを示した。

「わあ．．．」

ずっと砂ぼこりを上げて、延々と一面黄土一色だった砂漠が開けてやがて緑が茂り始め、青々とした美しい水が中央からゴボゴボと沸き上り、アラブの暑い太陽に照らされキラキラ湖面を輝かせる砂漠のオアシスが見えて来た。

そしてその回りにカラフルな町が形成されてて、美しい景色と同化している。

オアシスの先には美しい山々と、そのまた先には近代化されたビル群が見えた。

美しい自然と調和する村．．．それに反して似つかわない感じの近代化された都市．．．。

まるでだまし絵を見ているような、不思議な感じがした。

その村と都市との中間辺りの小高い丘に高い城壁に囲まれた、神々しい王宮が見えた……。

一見共通性がないこの景色が、全て揃うと違和感なく素晴らしくみえてくる……。

……エルラバドス王国……不思議で美しい国だ……。

「なんて美しい……素晴らしいです」

由奈は目を輝かせ頬を紅潮させた。

オアシスの側に車を止めて、王と二人で降りて美しい景色を眺めた。

「不思議です……砂漠の真ん中の地の底から……こんなに美しい澄んだ真水が、懇々と沸き上って……。

恐れ多いと言うか、神々しすぎて、ちょっと恐いような気もして来ます」

「恐いか……」

アシユラフ王がふと笑った。

「中央から沸き上るあの部分は、底なしとも言われてる……。伝説によれば、地の底まで続いているとも……」

「まあ……。私……来て良かったです。『アラドオリウス（幻想の滝）』は見れなくても、こんな素晴らしい砂漠のオアシスが見れて……」

来て良かった……。この美しい風景を心の中に焼き付けておこう……そしてこの美しい雄々しい王の事も……。ほんの少し、勇気が湧いて来た……。

「まだ見れないと決まった訳ではないぞ．．．」

「え？」

何をおっしゃりたいのかと、王の瞳の中を探るように見つめた。

「私の妻になると言うのなら、見せてやらなくも無いが．．．」

「また．．．お戯れを．．．」

私の様な異国の何も持ってない娘が、あなた様の様な高貴な身分のある方の妻になれる訳がありません。

それに．．．すぐ日本に帰らなくてはならないし．．．」

「．．．．．」

なにも答えずに、雄々しく深いその瞳で見つめられて、心臓が飛び出しそうに鼓動する．．．。

「ご．．．ご冗談で言っておられるのですよね？」

（そんな瞳で見つめられると．．．魂が持って行かれそうなそんな錯覚に陥ってしまいそう．．．。）

「いや．．．一目見てお前を気に入った」

「そんな．．．私の事など何もお分かりにならないのに．．．」

この王の真意が全く分からなかった．．．。

昨日会ったばかりで殆ど話をした事も無いのに．．．。いったい何を考えているのだろう．．．。

そう言って私を騙して、体をうばってゴミのように捨てるつもりなのだろうか？

きっと一夜の遊ぶ為の女にしようと、そんな事を言っているのに違

いない．．．。

それに私の．．．私の命の炎は．．．いつ風に吹かれて消えてしま  
うのか．．．分からないのですよ。

そんな事をおっしゃられても．．．私の病の事を知った途端．．．  
そのお気持ちがあきつと変わるでしょう．．．。

でも．．．誰かに救われたい．．．救って欲しい．．．頼りたい．．  
。

この方だったら．．．私のこのどこまでも深い心の闇を．．．ほん  
の一筋の光となって照らしてくれますか？

「どうだ．．．」

「そんな事おっしゃって、私をもて遊ぶおつもりなのですね？

いくら異国の娘で、大した身分も何も無い者かも知れませんが、酷  
いです。私はそんな軽い女ではありません」

（やはり病の事は話せない．．．話した途端にこの王が背を向けて  
去っていく姿を見たくない．．．。

それは絶望だから．．．。）

「妻にと言っておるのだぞ．．．」

「そんな事ありえません」

（もうそれ以上おっしゃらないで下さい．．．じゃないと．．．そ  
の手を捕まえて縋付いてしまいそうです．．．。）

「ならば、証拠にこれをおまえにやろう」

そう言つて、アシユラフ王は自分の首に下がっていた高価なペンダ  
ントを外し、由奈の首に下げた。

キラキラと輝く赤・青・緑の宝石と非常にグレードの高い煌めくダ

イヤがちりばめられ、それらを引き立てるように美しく装飾された  
光り輝く黄金のチェーンと台座。

見るからに価値のありそうなペンダントだった……。  
こう言う物に知識のない由奈でも、これが物凄く価値のある物だと  
言う事は一目見て分かった。

「何ですか？」

「王家に代々伝わる物だ……。」

王が唯一妻にと選んだ者に託す物だ……。」

「こんな高価な大切な物を受け取る訳には参りません」

「私の心を受け取らぬと申すか？」

キラリと光る目が冷ややかに光って恐かった……。

「もし……お返ししたら……。」

「余の意を受け取らぬと申すか？」

「日本に帰らなくてはいけないし……。」

「要らぬのなら、このオアシスに投げ入れるがよい。」

この国の王である余が女に渡した物を帰されて受け取る事など出来  
ぬ

「王家に伝わる大切な物だとおっしゃいましたね。そんな大切な者  
を投げ入れるなんて出来ません」

私も悪かったと思った。

王の心の内を為す様な事を言つて……。

妻になる気持ちが無いなら、初めからはっきりと断れば良かったのだ。

高貴な気高い王が、女性に渡した物を突き返されたら．．．。王にとっては、そんな事はあつてはならない事だろう．．．。

心が迷っていた．．．。この方だったら私をこの暗闇から救い出してくれますか？そんな淡い希望を抱いてしまっていた。

私の残された時間はそんなに長くはないかもしれない．．．。

このまま朽ち果てるか．．．いいえ．．．この方とほんの少し夢を見させてもらってもいいですか？

光を私にくれますか？

(第3話に続く)

### 第3話 王の愛

「……自分に残された時間が残り少ないのだとしたら……この方の傍で一時夢を見させてもらってもいいでしょうか？」

ふとそんな気持ちの心を、突然の風のように通り過ぎていった。

「あの……もし妻になると言ったら、時々は日本に帰して戴けますか？」

「度々帰す訳にはいかぬが、たまにならよかるう……」

心の中ではまだ迷いがあつた……。

病の事を話さずに、この方の手を掴んで……でも……。

「分かりました。あなたの心をお受けします」

そう言った途端に強く抱きしめられ、深い口づけを落とされた。

砂漠の王の口づけは、燃え尽きてしまいそうな程、熱い灼熱の様な情熱的な口づけだった……。

「……由奈は心の中で、許して下さいと叫んだ……。」

王は家臣に、至急結婚の祝宴の儀式の用意をするようにと伝えた。

「妻になった暁には『幻想の滝』をそなたに見せてやろう……。」

「楽しみにしております」

由奈は王の愛を受け入れてから、慌ただしく宮殿に向う事になった……。

「あのも．．．陛下。私の様な異国の娘を国民や家臣の方々は受け入れて下さるとは思えないのですが．．．」

「要らぬ心配だ。余はこの国の王だぞ。余が法律だ。

歴代の王は全て自ら選んだ者を妻に迎えておる。

そなたのように遠い東洋の国から来た娘は初めてだが、歴代の王の妻には異国の者もいた」

「構わないとおっしゃるなら．．．」

まだ自分が信じられなかった。

こんな立派な人の妻に？ これは幻かもしれない．．．。

こんな大胆な行動をとる自分も信じられない気持ちでした．．．。

「あの．．．」

「まだ何かあるのか？」

「私．．．特に信仰している宗教はありませんが、やはり、ムスリム（イスラム教徒）にならなくてはいけませんか？」

「そうだな．．．了承してもらえるか？」

「まだムスリムの事は良く分かりませんが．．．分りました」

「私が色々そなたに教えるので安心しろ」

「はい．．．」

安易に妻になると言っただけけれど、色々と簡単にはいかない問題もあるのだと実感した。

それに親に何も相談しないで勝手に妻になるだなんて決めてしまつて．．．。

この事を伝えたらどう思うだろう．．．今は旅行中であちこち観光して楽しんでいると思つてはいるはず．．．。

まさか王の妻になると勝手に決めてしまつて．．．これから婚礼の儀式を行う事になるなんて．．．そして私はあの王のものになるのだ．．．。

正気とは思われないだろう．．．でも、このアラブで普通とは違つう人生を送つてみたい．．．この美しい国と、素敵な王の元で．．．。

一時、忘れたい．．．。

不安、悲しみ、心の痛み．．．死の恐怖．．．。

何もかも忘れて、心穏やかな時間を送りたかつた。

別の人生を送りたい．．．。

\* \* \* \* \*

王宮に到着して驚いた．．．。

想像以上に立派な宮殿に、一つ一つが値のつけられないぐらいの歴史的にも価値のあるような、高価な物ばかりだつた．．．。

まばゆい黄金に大きな色とりどりの宝石．．．金糸銀糸が織り込まれた美しい布地に、素晴らしいじゅうたん．．．。

磨き上げられた大理石に、凝つた細工の丁度品の数々．．．。

大広間で1週間かけて結婚の儀がとり行なわれた。

その間はまだ王と触れ合つてはならないようで、別室が宛てがわられて、そこで生活した。

．．．王は気付いていた．．．。

この娘の心の中にはなにかあると．．．。

生まれて初めて心奪われた娘を手放したくない．．．。  
慌ただしく結婚して、少しでも早く我が物にしたかった．．．。

．．．．そして結婚の儀の最終日．．．。

身を清められ、幾重にも重ねた薄地のコットンオーガンジー布に、  
胸元に美しい刺繍を施したナイトドレスを着せられて、王の寝所に  
通された。

たつぷりのドレープの薄布地の天蓋に、アラブ独特の美しい柄のシ  
ルクのファブリックのベッドに待ちかまえたように横たわるアシュ  
ラフ王．．．。

いつもはアラブ人特有の民族衣装である、カンドーラをまとい、頭  
にはゴトラをかぶっているが、今日は上半身裸で下だけ薄地のアラ  
ブパンツを履いてて、その官能的な美しい姿にドギマギする。

上半身裸体の体は筋肉質で腹筋が割れてて、非常に美しい．．．。  
褐色の肌がその雄々しい体に良く似合う。

ゴトラをかぶってない姿は初めて見た。

少し固そうな漆黒の緩やかなウェーブのかかった流れる髪．．．。  
長いまつ毛の凜とした澄んだ瞳．．．。  
何者も近付けないぐらいの神々しい存在感があり、正視出来ないぐ  
らい眩しく美しい．．．。

この王の中の王に腕にこれから抱かれるのかと思うと、緊張と不安  
と恐れと．．．少しトキメキと．．．様々な気持ちが交差して、足  
がすくんで震えてくる．．．。

「はやく」

「はい」

ベットの近くまで来たら、待ちわびたぞと言う感じに手を掴まれて、王の元に引き寄せられた。

「あ」

「この日をどれだけ待ち望んだか．．．今宵から毎夜、余の腕の中に抱かれよ」

\* \* \* \* \*

雄々しい王は伽の時も雄々しく身を焦がされるように情熱的で、一晩中抱かれて、最後は気を失ったまま眠りに付いてしまった．．．アラブの女性の様に豊満でタフな体つきとは違い、細身で病を抱えている由奈にはかなりの負担だった．．．

．．．目覚めた時には、王の姿は無かった．．．

よるめきながら、バスルームに行き熱いシャワーで体を洗い、入浴剤の入ったジャグジーバスに入った．．．

私はとうとう王の妻となったのだ．．．

今ここにいる自分がまるで夢の中にいるような気がしてくる。

ふと左手の薬指を見たらそれが現実なのだと思った．．．

昨夜、伽の前に賜った王妃の印の黄金の指輪．．．

美しく彫金された黄金のリングにちりばめられたルビー、エメラル

ド、サファイヤ、ダイヤモンド．．．。  
亡くなられたお母上様が先王から賜った物だったと聞かされた。

由奈が起きたのを見計らって、侍女が着替えを用意して、食事の準備をしてくれた。

由奈にあてがわれた侍女は3人．．．。

日本に留学経験もあり、日本語が上手で頭も切れて何かと力になってもらえる一番信頼出来る頼れる存在の、アイシャ、年は28歳。働き者でよく気がつく16歳のハミダと18歳のライラ。

「よく眠られてましたね。お疲れになりましたか？」

「今何時かしら？」

「昼過ぎでございます」

「ええっ．．．もうそんな時間に？」

死んだように寝てしまつて、そんな時間まで起きられなかった事に驚いた．．．。

寝ても寝たりないぐらいまだ体が怠い．．．。もしかして、体の状態が悪化してきているのかもしれない．．．。

「あの．．．アシユラフ王は？」

「はい。国王様はいつも一日、接見や執務が山のようにございまして、お会い出来るのは夜になってからだと思ひます．．．」

「そんなに忙しいの？」

「はい。」「心配されなくても今宵もお渡りのご予定ですから、ご安

心ください」

「・・・また今宵も？と思つたら、気が重くなつて来た・・・。

「あの・・・伽をお断りする事は出来ませんか？」

その意外な言葉を聞いて、アイシャは目が点になった。

「何をおっしゃいますか！！ 国王様のご寵愛を受ける事が出来るのはとても名誉な事ですよ。」

お断りになるなど、その様な事をおっしゃるなんて、国王様に対してご無礼でございますよ」

「でも・・・私・・・体調が優れないし・・・。」

「初めての夜をお迎えになられて、幸せすぎて、きつとお気持ちが悪く不安定になつてらっしゃるのですね。」

今宵も思う存分国王様のご寵愛をいただいたら、不安なお気持ちも無くなると思います」

心の中で、そうはならないって思った・・・。

昨晚のような・・・考えただけでも恐ろしくなつた・・・。

王はとても素晴らしい方だと思つ・・・知れば知るほど心が引き寄せられていく・・・。

だけど、1週間続いた結婚の儀での緊張と、昨夜の緊張と身を焦がすような激しい王の愛に、疲れはピークに達していた。

ここになつて旅先の疲れもたまつて来たのかもしれないし・・・それに・・・気がつけば薬もあと残り少なくなつてきて、不安になつてきた。

(第4話に続く)

## 第4話 王の怒り（前書き）

注意）文中、血の要素の含まれる文面がございます。苦手な方はご注意ください。

## 第4話 王の怒り

それから毎夜毎夜、王は欠かさず寢所に渡ってきて、深く情熱的な愛から開放されるのは明け方近く．．．。

由奈が起きた時には昼過ぎと言つ日々が続いた。

由奈の疲れはどんどんたまって行き．．．。

日に日に起きれなくなつて来て、今日はついに起きた時には午後3時をまわっていた。

ブランチを食べ終えて、少し寛いだらもう．．．と思えるぐらい夜がやつて来るのが早い。

それに．．．妻になったら『アラドオリウス（幻想の滝）』を見せしてくれる約束だったのに、一向に見せてくれない．．．。

何の為にここににいるのか？

ここにいての意味が分からなくなつて来て、そろそろ日本に帰りたくなつてきた。

．．．それに、薬がとうとう残り3日分となつてしまった。

「アイシャ．．．お願いがあるのだけど．．．」

「はい。」

「この国で薬を入手する事は出来るかしら？」

「都市の薬局や病院なら入手出来ると思いますが．．．」

「特殊な薬なんだけど．．．」

「国王様にお話しになってみてはいかがでしょう？」

「病気の事をまだ話してなくて．．．今頃になって話したら、きっとお怒りになるでしょうね？」

『病気』と聞いて、アイシャは驚いた顔をした。

「それはどのようなご病気なのでしょう？」

「日本でも患者がたった20名ほどと言われる、とても難しい病気です．．．」

由奈はアイシャに細かく説明した。

「そんな大変なご病気を．．．。きっと国王様がとてもご心配になられるかと．．．」

「じゃあ話さない方がいいかしら．．．」

「私は、お話しになったほうがよいかと思いますが．．．  
後からお知りになった時に、どれだけお心を痛めお怒りになるか．．．」

「気が重いけれど、話した方が良さそうね。」

．．．追々話してみますね」

王の反応を考えたら気が重くなるけど．．．。

「お薬は切れると大変なのです。今から都市病院に行つて出来るだけ早く頂けるように致します」

「お願いします」

私は薬のリストをアイシヤに渡した。

\* \* \* \* \*

．．．今日も夜がやって来て、アシユラフ王が寢所にやって来た。  
なんて話そうか？あれこれ思い悩む．．．。

「あの、陛下．．．」

「どうした？」

「お願いがございます」

「なんだ？」

「私．．．」

『重い病にかかってます．．．』と言う言葉が、言い辛くてなかなか出て来ない．．．。

「あの．．．そろそろ日本に一度帰りたいのですが．．．  
その一言を言ったら、不快そうな表情に変わった。」

「ならぬ」

「でも、日本にも帰してくれると約束されたではありませんか」

「今は結婚したばかりだぞ．．．。当分帰ることは許さん」

「そんな．．．」

何故かその言葉が絶望的な言葉の様に聞えた．．．。

「私、大学だったあるし、両親だって心配してると思いますし．．．  
帰らないと．．．」

「絶対にダメだ!!」

「それに．．．私．．．」

王の顔を見たら、どうしても『病気です』の言葉が言えない．．．。

「それに約束の『アラドリウス（幻想の滝）』を見せて下さらないし．．．。何の為にあなたの妻になったのか分からなくなります」  
つい王を怒らせるような言葉が口をついた．．．。

疲れも酷くたまっている、言葉を選ぶ余裕も消えて我が儘になっていた．．．。

その言葉に王は怒った顔をした。

「そなたは滝の為に余と結婚したのか？」

「妻にならないと滝は見れないと言ったのは陛下ご自身ではありませんか？」

更に追い討ちをかける失言．．．。

「余に全く愛情は抱いてないのか？」

．．．『愛してます。』って自信を持って言えなかった．．．。  
まだ自分の気持ちが良い分からない．．．。この方の手を掴んでしまったのは愛だったのか？

残り少ない時間、今までと違う人生を送ってみたかった．．．。全て嫌な事を忘れたかった．．．。

確かにこの王に強く魅かれて、この人の物になってもいいって思っ

だから結婚したのだが、心から愛しているのかどうか・・・自分の  
気持ちがあつきり分らなかった・・・。

「何故答えぬ」

追いつめられると余計に答えが出てこなくなる・・・。

「自分の気持ち分かりません・・・」

その一言に王は激怒した・・・。

「余の愛が何故分からぬ・・・」

押さえつけられて、衣類をはぎ取られ、激しく抱かれた・・・。

「お願いです・・・乱暴しないで下さい」

怒りで上気している為か、雄々しく灼熱のように情熱的な王の愛は、  
いつもよりも激しく身が焦されそうになった・・・。

「どうだ・・・愛してると言ってみる!!」

\* \* \* \* \*

気がついた時には辺りは薄暗くなってきていた・・・。

侍女のハミダとライラが不安そうな顔で覗き込んでいる顔が見えた。

「奥様、やっとおきられましたね」

「ハミダ・・・今は何時かしら？」

「間もなく夕方の5時になりますが．．．」

「ええっ．．．もうそんな時間に．．．?!」

「アイシヤは？」

「すみません。まだ戻られてないようです．．．」

「そう．．．」

「ご入浴されますか？」

「ええ．．．」

ハミダとライラに手伝ってもらいながらやっとの事で体を起こした。頭が重くフラフラするし、体も起き上がるのがやっとだ。

ハミダが裸体が見えないように、大判のバスタオルで包んでくれた。

ライラがその間にベットメーカーキングをしはじめた。

「お体をお流ししましょうか？」

「いえ大丈夫．．．」

「では、お上がりになるのをお待ちしてます」

「ありがとうございます．．．」

湯槽に浸かりながら、あれこれ考えた．．．。

王の激しい愛は分かるけれど．．．一方的で、このままでは殺され

てしまうのではないかと不安になってきた。

「……今宵も王はやってくるのだろうか？」

王の腕に抱かれる喜びを知ってしまい、嫌ではなかったが……とても体が辛い。

私は妻と言う肩書きの、王の奴隷になっているだけではと思えて来た……。

バスルームから上がって、腕を見たら紫斑があらわれて、体調が悪くなってきた事を感じた。

「うっ」

いきなり込み上げてきて、もどしたら、吐瀉物の中に血が混ざっていた……。

薬はとうとう切れてなくなってしまった……。

命をかるうじて繋いできた薬がなくなってしまった。

何の為にこの国にやってきたのだろうか？

ずっと見たかったあの滝も見れずに……王の慰み物としてこの地で果ててしまうのだろうか。

もし帰してくれると言っても、その体力はないかも知れない……。地球の重力に押しつぶされそうなくらい、今日は体が重い……。

「お着替えをお手伝いしましょう……」

「ライラ……私……具合が悪いから寝ます……」

「奥様．．．何かお召し上がりにならないと．．．」

「いいえ．．．食べれそうにないので．．．」

やっとの事でベッドまでたどり着いて、そのまま横たわった。

\* \* \* \* \*

そのまま死ぬように寝てしまい、気がつけば側に王が添い寝していた。

「きょうは許して下さい．．．」

「どうしたのだ．．．」

「私．．．あなたにどうしても言えなかった事が．．．」

「どうした？」

「私．．．血液の難病で、今飲んでる薬が効かなくなったら、死ぬかもしれない。」

残された時間が残り少ないのを感じてこの国に来ました。

死ぬ前にあの滝を見たいと思って．．．。

あなたの妻になったのは、あなたに心魅かれたのもありますが、死ぬ前に今までと違った人生を送ってみたいと思って．．．」

「具合が悪いのか？」

「あなたにどうしても言えなくて．．．黙っていてごめんなさい」  
そう言っている間にも、どんどん顔は青ざめていった。

「ユナ．．．」

由奈の急変に王が驚き、慌てて侍女を呼びつけた。

．．．その時だった．．．。

「奥様、アイシヤが戻って来ましたよ」

アイシヤは白人の女医を数人連れて戻って来た。

「奥様、お薬やつと入手出来ましたよ。お医者様にも来ていただきました」

「アイシヤ．．．」

由奈が起き上がるうとした時、込み上げるものがあったとおう吐したら、大量の血だった．．．。

「血．．．」

（第5話に続く）

## 第5話 夢にまで見た幻想の滝（前書き）

血の要素の含まれる文面がございます。こつ言った文面が苦手な方は閲覧を避けるか、十分ご注意下さい。

## 第5話 夢にまで見た幻想の滝

大量の血を吐き、意識も途絶えて気がついたら都市の病院の集中治療室にいた。

腕には輸血と薬の点滴液がつけられて、鼻から管が通されていた。

「奥様、気がつかれましたか？」

「アイシャ．．．」

「戻ってくるのが遅くなってしまい申し訳ございませんでした。薬と専門の医者がなかなか見つからず手間取ってしまつて．．．」

「ありがとうございます．．．あなたのお陰で命びろいしました」

「今、緊急輸血して、薬も投与したのもう大丈夫ですよ。執務を終えて、間もなく国王様もこちらにご到着されますので．．．」

「怒つてらっしゃるでしょうね？」

「大丈夫ですよ、逆にご自分を責めておいででした」

「そう．．．驚かせて、ご迷惑をおかけしてしまつたわ」

「お元気になったら、幻想の滝にも連れて行って下さるとおっしゃつてましたよ」

「本当？ 楽しみ．．．」

しばらくしたら外の廊下がざわついたので、アシュラフ王が来て下さったのだと分かった。

「ユナ．．．」

集中治療室の入り口自働ドアが開いて王が入って来た。

「こんなお目汚しされる姿をお見せして、申し訳ございません。それに、病気の事を黙っていて、すみませんでした。病の事を話せば、きっと私の元から去られてしまう．．．そんな不安で、何度も話そうと思いつながら、話せなくて．．．こんな事になってしまい本当にすみませんでした」

「その様な事構わぬ。余の方こそ、具合が悪い事にも気付かずに、そなたの事を気にかけてやらず余の思いを通してしまって、悪い事をした。許せ」

「陛下は何も悪くはございません。私が隠していたから悪いのです。死を身近に感じて、偶然知ったあの美しい幻想の滝を一目見て死にたいと思つて、ここに来ました。

そして、陛下のようなに素晴らしい方に望まれて．．．あなた様のお気持ちも考えずに、私の我が儘な思いを通してしまい、あなたのお妻になろうと思いました。

幻想の滝．．．見せて下さると、アイシヤから聞きました。見れたらもう思い残す事はありません．．．」

「このまま死ぬなど許さぬ。  
最高の医者呼んで、そなたの病を絶対に治してやるから、安心しろ」

「とても珍しい難病で、日本でも患者が20名程しか居ないと聞きました。」

新しい薬もまだ開発されてない事も・・・」

「諦めるでないぞ」

「はい・・・」

いつもは勇猛果敢で雄々しく、少しクールな王も、今日はとても優しく頼もしく見えた。

一時は病状が悪化して危ない状況だったが、緊急輸血と優秀な医者の方針する薬のお陰で、由奈は症状が目覚しく良くなり、宮殿に戻って来る事が出来た。

この国の医療は、日本よりも進んでいるようにも思えた。

最先端の医療技術と、医療器具、清潔で近代化された病院・・・。

世界中から優秀な医師をかき集めた様だ・・・。

それに都市は非常に豊かで、富裕層の多さを感じた。

地方の村にしても、貧困にあえぐ人が居ない・・・。

福祉なども充実しているようだ。

この国の国民の豊かさそうな穏やかな顔・・・笑顔に溢れた子供達・・・。

・・・素晴らしい国だと思った。

アシュラフ王の才腕とリーダーシップによるものが大きいのだろう・・・。

元気を取り戻し、宮殿に戻ってきてから変化した事がある。  
支配的で独りよがりにも感じた王との伽が変化した。

由奈の体調を伺って、調子の悪い時には傍らで優しく抱きしめて寝るだけにし、調子のいい時にも体を気遣って優しく抱いてくれるようになった。

「奥様、まもなく国王様がお渡りになりますよ」  
アイシャが嬉しそうに微笑んだ。

間もなくして、真っ白な夜着を身にまとった雄々しい王が優しくそっ  
な笑をたたえ現れた。

「陛下．．．」

「今日は体調はどうだ？」

「はい、今日はとても調子が良いです」

「ならばそなたを抱きしめてもよいか？」

「はい．．．」

ほほ笑みながらはにかむ由奈。

「明日は、『幻想の滝』に連れて行ってやる」

「ありがとうございます」

最近心も通じ合い、由奈は王の事がかけがえのない人になってきた。

王がポツリと心の内を打ち明けた事がある。

「そなたの事を激しく求めて、辛い気持ちにさせて、すまなかつた．．．。そなたが余の元から離れて居なくなってしまう事をいつも恐れていたのだ。

それに執務が忙しく、いつもそなたに会えるのは夜のみ。

一緒にいられる時間も限られてて、僅かでも時を無駄にしたいくないと焦りもあつた」

「私．．．優しく抱いて下さる陛下の腕の中で眠る事が、嬉しくて幸せになりました．．．。

お恥ずかしながら、こつやつて沢山語りあいたい．．．もつとお会いたいです．．．。どんどん欲深くなってしまうております」

「んん．．．ただ語りあうだけがいいのかな？」

「あ．．．いえ．．．もつと．．．」

「もつと？」

「恥ずかしくて．．．そんな．．．言えません．．．」

「こつされるのはどうかな？」

アシユラフ王は、自分の膝の上に由奈を乗せて、スルリと衣を肩からずらして落とし、首筋から胸へと優しくキスを落として言った。

「あ．．．それも．．．」

「いいか？」

「はい．．．」

おそらくこんな私では物足りないであろうと．．．時々不安になるが、毎夜欠かさずに来て、明け方に王の居室に戻って行く．．．。

本当は昼間でも一緒にいたいのが、一国の王となると本当に多忙で時々国を空ける事もあり、そんな時には必ず電話をくれる。

．．．そして、愛し合った後にはいつも由奈の事を心配して優しい言葉をかけてくれた。

「体の方は辛くないか？」

「はい．．．いつも気にかけて下さり、私、幸せです．．．」

「明日『幻想の滝』を見て、その後、一度日本に帰ってもいいぞ」

「えっ？ 本当ですか？」

「本当は帰したくないが．．．勉強の方も続けても．．．。まだ未練がありそうに、珍しく王が口ごもった．．．。

「そうしたらなかなか戻って来れませんよ？」

「本心は、一分一秒でもお前を手放したくないが、後々そなたに恨まれたり、嫌われて日本に永久に帰られても困るし．．．。洪々許そう．．．。」

苦しい顔をしながらも、許可してくれた。

「嬉しいです．．．」

「お前が望めばすぐに迎えの専用機をよこすから、戻ってこれる時は僅かでも戻って来るのだぞ」

「はい．．．必ず．．．」

「仕事が片付いたら、余も一度日本とやらを見に行きたいと思っておる．．．」

「はい。その時は私がご案内致します」

アシュラフ王が嬉しそうに微笑んだ。

いつも心を見せないように、人々に雄々しい威厳のオーラをふりまき凜とする姿からは想像のつかない、王の人間的な人なつこい笑顔．．．。

きつとこの笑顔を知ってるのは私だけだろうと嬉しく思った。

\* \* \* \* \*

翌朝、アシュラフ王と由奈の乗る大型ジープと前後に護衛の車を連なり、バドニーヤ山に向った。

山はぐるりと高い柵でとり囲まれて、誰も入る事は出来ない．．．。中に入れるのは、山を守る神官達と王族のみ。

バドニーヤ山入り口にある大きな立派な門が開き、神官達が持つ輿こしに乗り、アシュラフ王と由奈は頂上を目指した。

山2/3まで来たら、ここからは、人1人歩けるぐらいの森に囲まれた山道で、歩いていかなくてはいけない。

「大丈夫か？」

心配そうな顔で、アシュラフ王が気遣ってくれた。

「はい、大丈夫です」

突然手を掴まれて、優しく手を引いてくれた。

「あ．．．ありがとうございます」

いつもの様に優しい笑顔を向けられて、心臓が高鳴った．．．。毎晩夜は一緒に過ごし、色々語りあったり、深く愛し合ったり、王に優しく抱き寄せられて眠りにつくが、昼間一緒に時間を共にするのはかなり久し振りで、とても新鮮で心が時めく。

途中、道が開けてて、大きな石が座り心地の良い素敵な自然のベンチになる場所があつて、そこで休憩した。

その場所から辺りの景色を楽しむ。

幻想の滝が近いのか？時々キラキラと水しぶきが降ってくる。

この山は音の反響がとても良くて、歌うと凄く響きそうと思った。

何気なく、歌劇「ホフマン物語」「生垣には、小鳥たち」の歌が浮んできて、緑に囲まれた森に向つて歌つてみた。

面白い事に、ソプラノの声に反応して小鳥が返事をするように鳴く．．．。

面白くて、続けて見たら、小鳥の声が近付いてきて、そのうち姿を現して、頭上を飛び交うようになった。

「陛下．．．鳥が反応して沢山集まってきましたよ」

笑顔で振り返ったら、非常に驚いた顔をして固まっていた。  
こんな感情を表に出して驚く顔を見たのは初めてだった……。

「私……何か失礼な事をしてしまいましたか？」

王ばかりか神官達も非常に驚いた顔をしてるので、やってはいけない事をしてしまったのかと非常に不安になった。

「いや……ユナ……君はバドーニヤ山の精霊の娘か？」

「え？」

「あの鳥達は、滅多に見れない幻の鳥だ……。フェニックスとも火の鳥の化身とも呼ばれてて、この中東ではこの山にしか住んでないとも言われておる……」

「まあ……。昔、日本のテレビ番組で見た事がありますが、ニユーギニア島に住む『オウゴンフウチヨウモドキ』に似てる鳥だなと思っただのですが……。  
本当に鮮やかな赤と、燃えるような黄とオレンジの、火の鳥の様な鳥ですね……」

「もう一度歌っておくれ……」

「はい」

由奈がまた歌い始めると、鳥がどんどん集まってきて由奈の頭上をグルグル弧を描いて飛び交った。

神官達はあの娘は、エルラバドス王国をお守りする聖山　バドーニ

ヤ山の精霊の娘だと噂し始めた。  
王もやはりこの娘はただの娘ではなかったと心の中で思った。

それからしばらく山を登って、目的地の『幻想の滝』へとやって来た。

何処が水源なのか？水が何処からやって来て、何処に消えていくのか分からない不思議な場所だった。

まるで霧のシャワーを浴びているように、天から細やかな霧雨が一年中止まずに降り続くが、空はほぼ一年中いいお天気で、太陽の光がキラキラと降り注ぎ、森の緑を育て、そこに住む生き物の命をはぐくみ、その水源がオアシスへと流れ込み湧き出で、エルラバドス王国を栄えさせ、人々を潤す生命の水……。

本当に幻想的な風景だった。

「またここで歌を歌ってくれないか？」

「はい……」

何気なく音と詩が自然と浮かんできて、美しいソプラノ高音で伸びやかに、天に向かって歌ってみた。

細やかな霧状に降り注いでいた水が、やがて、太陽の光に照らされてキラキラと瞬き始め、寒い雪の日に見えるダイヤモンドダストの様な現象が起きた。

そして……とても不思議な現象が起きた……。

遙か山の下の方から天に向かって、キラキラ輝かせながら七色の虹が天に向かって伸び始めた……。

……凄く不思議な現象が立て続けに起きた……。

「やはり．．．そなたはバドニーヤ山の精霊なのだな？」

真顔で王が言った．．．。

神官達が麗々しく皆、由奈にひれ伏した。

『ち．．．ちがいますよ！！ 私はタダの日本人女性なのに．．．』  
由奈はとんでもない事になったと思った．．．。

（6話に続く）

## 第6話 第一王女と王子の存在

あれから王妃ユナ様は、パドーニヤ山の精霊の化身と言う噂が国中を駆けめぐり、とんでもない事になってしまった．．．。

「あの．．．私は日本からきた普通の女性ですよ。何も不思議な力など持ってませんよ」

．．．．．そう言っても信じてもらえない．．．。

「陛下．．．科学の発展するこの世の中に、精霊とか、霊力とか．．．そんな非現実的な事ってあるはずないですよ？」

「うむ。分かっておる．．．」  
愛おしそうにほほ笑みながら、サラリと受け流すアシュラフ王．．．。

57

．．．．．何処までそう思ってるのか．．．疑わしい気がした。  
信じ込んで目を輝かせる人々が恐ろしくも思えた．．．。

それに不安材料がもう一つ．．．。

精霊の娘を、東洋に帰してはダメだと言う声も上がって来た．．．。  
この声が大きくなる前に、一度日本に帰らないと．．．。  
一生日本に帰れなくなってしまふんじゃないかと不安になってきた。

．．．．．そんな時、更に不安な事が．．．。

私はずっと王宮の、王の間のすぐ側の居室に住んでいたのだから知らなかった．．．。

この宮殿に、ハレムがあつた事など．．．。

「ねえ、アイシャ．．．。ハレムには何人ぐらいの女性が住んでるの？」

「そうですね．．．20名ほどの側室候補様と、80名ほどの侍女が住まわれております．．．」

言い辛そうな顔をして、苦笑しながら答えた。

「ですが国王様のご寵愛されているのは、ユナ様お一人でございますからご安心下さい」

「気をつかってくれて、ありがとうございます．．．」

「いえいえ．．．ほんとうでございますよ」

凄くショックだった．．．。

日本と違ってここではハレムとか、奥さんが沢山いる事も当り前なのかもしれない．．．。ただど．．．酷くショックだった．．．。

この宮殿にやって来た時には、毎晩激しく王に抱かれて、昼過ぎや夕方まで起きれなくて、一日が終るのが早かったが、今は、王が気遣ってくれるので、規則正しく朝早く起きれるようになった。

またお薬も良く効いていて、体調も凄く良い．．．。

．．．．．ただど一日やる事もなく簡単には外出も出来ず時間を持って余っていた。

宮殿内なら散策しても良いとの事で、最近あちこち散策し回ってい

る。

宮殿内はとてつもなく広いので、結構いい運動にもなるし、時間もつづせる……。

見た事のない花々や植物……時々恐ろしいカラフルな昆虫や爬虫類なども見かけて悲鳴を上げたりする事もあったが……。

あの時は、大変だった……。

衛兵が沢山集まってきて……王が怒って、昆虫や爬虫類除去騒ぎにまでなってしまうて……。

申し訳ない気持ちでいっぱいだった……。

もう迷惑をかけないように……絶対に悲鳴を上げないようにと心に誓った。

今日は侍女のライラを連れて、宮殿内を散策していた。

「ねえ、ライラ……あそこの建物は何なのかしら？」

「あそこはハレムでございます」

「見てみたいのだけど……」

「え？ いけなくはございませんが……」

「じゃあ見に行きましょう……」

「はい」

……一度ハレムを見て見たかった……。

どんな様子なのか、どんな方が住まわれているのか？

その時、高価な宝石を沢山身にまとい、美しい絹の高価そうなドレスを身にまとい、とても美しい女性が現れた。傍らには可愛らしい5歳ぐらいの男の子がいる。

「あの方は？」

「あの方は第一王女様の ジャミーラ様でございます。お子様は、お世継ぎのサアド様でございますよ」

そして、ジャミーラがこっちに向かって歩いてきたので、慌ててライラがポソツと耳打ちした。

「あちらは第一夫人様なので、ご挨拶なさって下さいませ」

。 . . . . 第一夫人がいたんだ . . . . 凄くショックだった . . . . 妻は自分一人なのだと思い込んでいた . . . . なんて愚かな私 . . . .

「その方は？」

ジャミーラが優雅そうに歩いてきて声をかけた。

「はい。ユナ様にございます」

頭を下げたまま、ライラがかしこまって挨拶した。

「初めまして、ユナと申します」

由奈も慌てて挨拶した。

「そう . . . . よろしく」

言い方がアツサリしすぎと言うか、冷たい言い方で、敵対心むきだしと言った感じの様子だった。

その夫人は胸から大きなまばゆい宝石を下げている。

「サアド．．．お父様の所に行きますよ」

．．．．お父様って．．．アシュラフ王の事ね．．．。

ジャミーラ夫人が行ってから、ライラにぼそつと言った．．．。

「物凄く大きな宝石をつけていたわね」

「あれは王家代々伝わります、正室様のお印でございます」

「ねえ、正直に答えてね。このネックレスは？」

「そ．．．それでございますか？ それは．．．」

「隠さずに教えて」

「それは、第二夫人様のお印でございます」

「ねえ、第二夫人て言うのは、やっぱり側室と言う事と同じなのかしら？」

「いえいえ．．．ハレムにいらしゃいますご側室様方は、何も頂いていない方が多ございます。 国王様のご寵愛を頂いた方のみ頂けるのでございますよ」

「そうなの」

平気なそぶりを見せていたが、心がズキッと痛んだ．．．。酷く悲しくて泣き叫びたかった．．．。  
つまり王のお手付きとなった者が、ご褒美のように貰える印のようなものなのね．．．。

私はやっぱり日本人だから、側室とか奥さんが何人もいる世界が理解出来なかった．．．。

正妻とお子まで居たのね。

つまり日本で言うと、自分は愛人だ．．．。

いくら一国の王で、威厳があつて偉いかも知れないけど．．．。

『酷い!!』つて思った．．．。

そして今までにない感情が沸き起こった．．．。

燃え狂う嫉妬の炎で焦げてしまいそうなそんな気持ちになった。

「ライラ．．．帰りましょう．．．」

「はい．．．」

帰りがけに見てしまった．．．。

サアド王子を抱き上げて、楽しそうに笑うアシュラフ王を．．．。

その傍らには、ほほ笑みながらジャミーラ夫人がいた．．．。

．．．．殿下．．．昼間会いに来ないのは、家族団欒していたからなのですね．．．。

そして私はやっぱり、伽がお目当ての、奴隷の様な存在だったのですね．．．。

急にアシュラフ王が嫌いになった．．．。

本当はとても愛してるし、好きだけど．．．こんな関係は嫌だと思つた。

ジャミーラ夫人にしてみたら、王が異国の娘を愛人に迎えて不快に思うだろう．．．。

夫人の気持ち理解出来る・・・。

ジャミーラ夫人と夫を奪い合う、そんな醜い争い事をする事も嫌だし、嫉妬に身を焦がし鬼となってしまっ自分も嫌だった・・・。

「私・・・やっぱり日本に帰ろう・・・。

この国に来て2カ月・・・。今なら大学に復学出来るし、体調も良くなったから、また夢に向って頑張れそうだ!!

「今宵も変わりなく、アシュラフ王はやって来た・・・。

いつもなら微笑んで迎える由奈が、布団に潜って身動きしないので、王は驚いた。

「ユナ・・・具合が悪いのか？」

「陛下、今日は休ませて下さい・・・。」

王がベッドに入って来て、ユナを優しく抱き寄せて、髪の毛を優しく撫でた・・・。

「陛下どうか優しくしないで下さい・・・。

「悲しくて涙が溢れてきた・・・。

「ユナ・・・何故泣いておる？」

「日本に帰りたくなりました・・・。大学もこのままだと留年しそうです。早く帰して下さい・・・。」

「必ず戻ってくると約束してくれるか？」

「．．．はい」

「必ずだぞ．．．」

「．．．はい」

嘘の返事をした．．．。

もう戻るつもりなどないのに．．．。

「本当は行かせたくないが．．．分かった．．．」  
アシユラフ王の声が震えて淋しげだった．．．。

．．．．．陛下、奥さんもお子さんも居るから、私がいなくてもお淋しくありませんよね？

．．．日本に帰っても、あなたの事、心の中でずっと思ってますから．．．  
．．．それから間もなくして、由奈は日本に帰して貰える事になった．．．

成田までエルラバドス国王専用ジェット機にされそうになったが、あまり大袈裟にしたいと言って、ドバイから成田への直航便が出ているアラブ首長国連邦国営のエティハド航空にした。  
ドバイまではエルラバドス国営機で送られることになった。

あの日からずっと王とは伽を交わしてない．．．。  
少し怪しんでるようにも見えた．．．。

．．．．．大学卒業まであと1年半．．．。

「ユナ．．．一年半後に必ず戻って来るのだぞ．．．」

「はい．．．」

．．．．王が時間がとれたら必ず日本に来るからと言ったが、

「お忙しい身、無理をなされませんように．．．私は大丈夫ですから」と言っただ．．．。

。 国王が個人的な事で国を出て他国に行く事は容易ではないはず．．．

．．．．そして由奈は日本に戻って来た．．．。

両親からはこっぴどく叱られた．．．。

「いきなりあちらの王と結婚したなんてとんでもない事言っただ、全く連絡ないし！！何やってたの！！」

「お前って子は、そんなふしだらな娘に育てた覚えは無いぞ！！」

しばらくガミガミ．．．。大変だった．．．。

当たり前だ．．．私はいつたい．．．何をやってたのだろうか？  
愚かな私．．．。

そしてしばらくして、法務大臣から「催告」の書面が届いた．．．。

何だろうと思ったら、二重国籍の選択だった．．．。

私はエルラバドス王国の国籍を取得していたらしい．．．。知らなかった．．．。

王家の戸籍は日本の皇室のように特殊なものようで、一般国民の戸籍には表記されない．．．。王家の系付図のようなものに表記されるようだ．．．。

だが、ユナの名前がそこに載せられているのかどうかは、今となっ

ては分からない．．．。  
もしかしたら、正妻のみ表記されるものなのかも知れないが．．．。  
とにかくエルラバドスの国籍は取得されていたようだ．．．。  
慌てて、日本国籍を選択取得して、エルラバドス王国の国籍を捨て  
た．．．。

日本国籍を取得してから間もなくして、国際電話がかかってきた。

「ユナ．．．どう言う事だ！！ エルラバドス国籍喪失の連絡が日  
本大使館から届いたぞ！！」  
アシュラフ王からだった．．．。

「陛下．．．陛下を欺いて申し訳ございません。私．．．そんな女  
です．．．ご寵愛を頂けるようなそんな価値のある女性ではありま  
せん。もう．．．お忘れになって下さい．．．。  
私．．．エルラバドスには戻りません．．．。日本で生きていきま  
す。」

あなたの幸せを、日本から祈ってます。ずっと．．．。  
第一御婦人のジャミーラ様とお子様を大事になさって下さいませ．．．  
最後の言葉は泣きすぎて、しゃくり上げて言葉がとぎれとぎれとな  
ってしまっただ．．．。

何か王が一生懸命話していたが、電話を切った．．．。

．．．．．さようなら．．．。あなたの事、愛しました。  
今ならはつきり言えます．．．。

『愛してました』と．．．。

(第7話に続く)

## 第6話 第一王女と王子の存在（後書き）

やっと心が立ち直り始めて、続きの話しを更新致しました。（と言  
いまして、以前発表した作品ですので、ほぼコピペなんです。が・  
・。）

かなり遅くなってしまう申し訳ございませんでした。

今回の話しはちょっと悲しく暗いですが、最終話はハッピーエンド  
の予定です。ご安心下さい。

## 第7話 命がけの命&夢に向って

-. -. . . あれから何度も国際電話がかかって来たが、頑として出なかった. . . .

日本駐留のエルラバドス外交官員が何度も訪ねてきたが、親に頼んで帰って貰った. . . .

その後. . . . 親に迷惑がかかると思い、家を出て一人暮らしを始めた. . . .

日本に来る時に王より頂いた、キャッシュカードや銀行預金通帳カード類などは、一切手を付けずにエルラバドス大使館宛に返納した。

王より賜った王妃の印だと言われた、あのペンダントは宮殿の私室に置いてきた. . . . だけど、新婚初夜の夜に頂いた黄金の指輪は持って来てしまった. . . .

一つだけ王と愛し合った思い出の品が欲しかった. . . .

お母様が先王より賜った品だと聞いたけど. . . . 中にはアラビア語で何やら書いてあるけれど. . . . 実は良く分からない. . . .

王や侍女達とはいつも英語で会話していたし、特に日本語の上手なアイシャとは日本語で会話していて、あまりアラビア語に触れる事は少なかったから. . . . 簡単な会話ぐらいしか出来なくて、文字の方は殆ど読めなかった. . . .

この思い出の指輪一個だけで、後は、あの日々は幻だったのだと思わせてくれるように、時が鮮明な記憶を消し去ってくれらるんだと思うっていた. . . .

．．．．． だけど暫くしたら、あれは現実だったんだと永遠に消え去らない置き土産を私は受け取ってしまった．．．。

．．．．． 私は王の子を宿していた。

親からはおろしたほうが良いと何度も説得されたが、絶対にそれは嫌だった．．．。

あの愛が本物だったんだと分らせてくれるように、私には大切な宝物だった．．．。

血液がとまりにくい難病だから、出産はとても危険な事だったが、命がけて生みたかった．．．。

大学の方は、今学年はあと半年なのでお腹の膨らみも何とか誤魔化し、通い続けた。

そして、出産予定日になる、来学年（４年生）だけ留年する事にした。

血液の難病持ちなので、休学の原因は何とでもつけられた。

それに、出産後期は大出血を起こして母子危険な状態になる恐れもあったし、エルラバドスで貰っていた新薬は日本ではまだ開発されていない無認可の薬で入手困難だった．．．。

日本で唯一認可されている元の薬に戻したので、体調も前ほどは良い状況とは言えなかった．．．。

薬による胎児への影響がとても心配だったが、それは大丈夫だった．．．。

．．．．． 出産は危険で命を落としかけた．．．。

子供は正常分娩で生む事が出来たが、その後、後産の時に出血が止

まらなくて、大量輸血となり、体の血液を総入れ替えするぐらいの輸血をした。

危なかったが、何とか乗り越えられた……。

そして王に似た、アラブ人らしい褐色の肌に大きな漆黒の瞳に長いまつ毛矯正な美しい顔立ちで凛々しく、緩やかな天然がかった少し固めの髪の毛の男の子を出産した。

……名前は王の名前をとって、天守良風と名付けた。

ニツクネームは 『アシユくん』

生まれた当時は小さかったが、すすくと元気に育ち、5歳になる今は、背も高く体格もいい、明るい正義感の強い、王に似た凛々しい男の子に育っていった。

幸いにも、何処か魅力的な人の心を引きつけるオーラのようなものを持ち合わせており、見るからにアラブ系のハーフの子と言う容姿で、更に母子家庭……。それでも虐められる事も無く、人気物でお友達も多かった……。

由奈は日本を代表する大きなミュージカル劇団 『色彩』のオーディションにストレートで受かり、今ではトップスターとなり、様々な役を演じて人気を博していた。

芸名は 『森泉 奏』。

今は、千夜一夜物語をミュージカル化した『シェヘラザード』を公演中で、由奈は主役のシェヘラザード役で出演していた。

丁度、日本に、初めてエルラバドス王国の国王が表敬訪問で、エル

ラバドス王国ブームに湧いていた。

アシユラフ王が劇団色彩の『シエヘラザード』を観賞されるとの事で、由奈は内心複雑な気持ちだった……。

あれから6年弱……。

かなりの年数が過ぎ去っていった……。

きっと正妻のジャミール夫人とお子様のサアド王子と、家族お幸せに暮らしているでしょうね……。

自分の事もう忘れてしまっただろうと思った……。

王と過ごした月日はたった2ヵ月程だったし……。

王に失礼の無いように、立派に演じようと決心した。

息子アシユには、今表敬訪問されている王様がお父様とは言えなかった……。

……今日は、都内の高級ホテルの一室で、色彩の劇団員と王との交流会で、由奈も来ていた。

幸いにも、劇場での衣装とメイクで、歌を披露する形なので、王も気がついてない様子だった……。

相変わらず若々しく凛々しく立派で回りの空気がピーンと張りつめるような緊張感も感じる、王の中の王と言う感じだ……。

「陛下……こちらが主役のシエヘラザードを演じます、森泉奏でございませう。」

劇団代表が、各役者を紹介した。

「お目にかかれて光栄でございます。」  
由奈は腰をかがめて丁寧にあやまった。

アシュラフ王はにっこり微笑んで手を取り、その手に優しく口づけた。

由奈は手にピリリと電気が走った感じがした。  
今でも色褪せない愛おしい方……。

王は私が由奈だとお気付きにはなられてないわよね……。  
かつて、この王に毎夜愛されて、優しく抱きしめられた……そんな事があつた事が信じられない感じがした。

王に触れられた途端に、心が切なくなつた……。  
……今でも愛してます……。そして、心が痛かつた……。  
……陛下を裏切つて、日本に残つてしまつてごめんなさい……。

多忙な王は嬉しそうな表情で歌を聴いた後に退席し、あとは、エルラバドス王国の高官達との立食パーティーとなつた……。

僅かな時間だつたけれど、アシュラフ王と会う事が出来て、由奈は嬉しかった……。  
息子の存在は知らないし、息子も知らないけれど、せめて同じホテルの空間で、一晚過ごしたい、そして過ごさせてあげたいと、由奈は息子をこのホテルに連れてきていた……。

王がパーティー会場を出て、自室ロイヤルスイートルームにもどろろとした時だつた……。  
アラブ系の容姿の男の子がパーティー会場に入ろうと、廊下から走つ

て来て、躓いて転んだ・・・。

王がその子に近付いて、手を貸して起こしてあげた。

「どうもありがとう。」

王が日本語通訳にボソボソと話しかけ、通訳がその子に話しかけた。  
「君は、この会場の関係者の子なのかな？」

「うん。 僕のお母さんは森泉奏だよ。 お父様はアラブの王様だつて・・・。」

通訳が苦笑して、森泉奏の息子さんだそうだとだけ訳した。

その男の子は転んだ時に洋服の中にしまっていた、首から下げていたネックレスが飛び出して、胸元にキラキラ光っていた。

金のチェーンには、高価そうな金の指輪が通してあった。  
そしてその指輪には色とりどりの宝石がちりばめられている・・・。

王が興味を抱いてネックレスを手にとって見て、通訳に話しかけた。

「ボク・・・この指輪はどうしたのかな？」

「お母さんがアラブの王様に貰った指輪だよ。 ぼくのお父様から貰ったって言ってたよ。」

通訳が苦笑しながら、通訳したら、王が非常に驚いた青ざめた顔をした。

「ボク．．．お名前は？」

「ぼくの名前は『アシユくん』。だけど、本当の名前は『アシユラフ』だよ。お父様と同じ名前だって」

「ボク．．．お母さんは本当に『森泉奏』って言うの？」

「うん。劇団ではそう呼んでるけど．．．家では『由奈』って言う名前なんだよ」

「ボク．．．この人はエルラバドス王国の王様で、君に用事があるんだって」

「ううん。知らない人についていっちゃいけないってママから言われてるし．．．」

「じゃあ、王様が用事があるからママを呼んできてくれるかな？」

「うん。分かった．．．」

．．．間もなくアシユが、由奈の手を引っ張って来て連れて来た。

「ママ、この人が用事があるんだって．．．」

「ユナ．．．君はユナなのだな．．．。いったいどう言う事なんだ！！」

王が英語で話しかけた．．．。

「陛下．．．」

青ざめて驚く由奈．．。

\* \* \* \* \*

それから由奈は王に呼ばれて、着替えてからアシュと一緒に王の口イヤルスイートルームに行った。

「ユナ．．．どれだけそなたを恨んだ事か．．．」  
険しい表情の王に萎縮する由奈。

「申し訳ございません。正室のジャミーン様とお子様のサアド王子様の存在を知って、又、ハレムに20人の奥様方が居ると知って、日本に帰ろうと決心しました。」

日本では、夫婦は一夫一妻が当たり前．．．。私は日本人ですので、沢山の奥様の中の1人にはなれませんでした．．．。私は強欲な卑しい女性です」

「そうだったのか．．．。だが、それは間違っておるぞ．．．」

「え？」

「私には妻はユナ1人．．．今でも．．．私は第2王子だった．．．  
。王の座についたのは、第1王子の兄だったが、病死して私が続いて即位したのだ。」

そして、ジャミーンとサアド王子は先王の妻と息子．．．ハレムの者達も、先王の妻達だ．．．。  
今はあそこは離宮となり、先王の縁の者達が余生を送る場所となっておる」

「ええっ・・・」  
その話を聞いて腰が抜けそうだった・・・。  
この6年間勝手に誤解して、王を裏切ってしまったと思うと、申し訳なさすぎて消え去りたい気持ちにもなった。

「私は未来永劫妻はユナのみ・・・あの妻の印に送ったペンダントは父王の第2王妃だった母の物・・・。  
先王は第1王妃の子だった為、ジャミールはそなたよりも立派なペンダントをつけておるが、余が王となった今は、私の妻であるそなたのほうが格が上じゃ・・・。  
先王が亡くなった今はいくら王宮に居座ろうとも、もうそんな力は無い・・・。  
あのハレムは今は離宮として、先王の縁の者達がただ余生を送る場・・・。」

異例となるのだが、ユナは王妃として、王宮の王の間のすぐ近くに住まわせていたのだぞ・・・。  
それに、今でも、王宮の系譜には、そなたの名前がある。  
もう1人、余の息子の名も記載せねばならぬな・・・。」  
王がアシユを見て優しく愛おしげに微笑んだ。

「私はなんて酷い事を・・・。」  
呆然として頭の中が真っ白になった・・・。

「それに・・・そなたは今でもエルラバドス王国の国民・・・。国母となっておる。日本政府が何と言おうと、余は折れん・・・。」

「じゃあずっと二重国籍に？」

「そうじゃな・・・。」

今まで自分のやって来た事は一体なんだったのか？

王の心を知らずに1人身勝手に思い込みで空回りして・・・王を平気で裏切ってしまったて・・・。

「なんてお詫びしていいのか・・・許される事ではありませんね」

「悪いと思っておるのなら、戻って来てくれるか？」

「今すぐにと言うのは・・・」

「もう余の事は忘れてしまったのか？」

「いいえ・・・ずっとあなたの事を思い続けて参りました。今でも・・・」

その言葉を聞いて、王が優しく微笑んだ。

「ならば・・・今回日本に来たのはそなたを捜し出し、エルラバドスに無理矢理でも連れて行こうと思ったからだ・・・。表敬訪問は表向きの事・・・」

「ええっ？」

「一年半の約束だったのに・・・間もなく6年になるぞ!!」

叱り飛ばすように言われて、ぐうの音も出ない・・・。

「は・・・い」

それを言われると何も言えなくなってしまふ・・・。

「仕事もありますし、今すぐにと言うのは無理ですが、出来るだけ早く行けるようにしたいと思います」

「もう待てぬ!」

駄々っ子のような王の言葉に、唯々小さくなる由奈。

確かに．．．6年待もたせてしまった．．．。

「では、あと2週間．．．今の公演が終るまで待つて下さい．．．」

「じゃあ余も2週間ここにいます」

「そんなに長い期間国を空けられては．．．」

「そなたのせいじゃ」

益々小さくなってしまふ．．．。

「分かりました．．．」

早く余の可愛い息子をこの手に抱かせよ

「はい．．．」

その時、アシュが走ってアシュラフ王に飛びついた。

「お父様？ 僕のお父様なの？」

アシュの目はキラキラ輝いて、大喜びした。

「こんな立派な人がお父様で僕嬉しい．．．」

アシュは王の頬に優しくキスした。

王も優しくアシュにキスして、頬擦りした。

今まで夢に見た憧れの父親に会う事が出来て、アシュは大興奮して暫くはしゃいだら眠ってしまった．．．。

「本当に我ながら余に似ておる」

「子の事も黙ってて、申し訳ございませんでした」

「本当にそなたは憎らしい女子じゃ・・・」

「はい・・・」

その言葉は凄く心に刺さるし、本当にそうだと思い、申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

「じゃが余はそなただけにはかなわぬ・・・。そしてこの世で一番可愛らしく愛おしいと思っておる」

「陛下・・・」

「そなたをこの腕に抱いてもよいか？」

「だっ・・・ダメです・・・」

王は、その言葉には凄く不満に思った様で、少し怒った顔にも見え

た。  
「余に抱かれるのが嫌なのか？」

「ずっと・・・あなたの腕に抱かれないと、焦がれ願ひ続けて参りました。でも・・・今日はダメです」

「何故じゃ？」

（第8話に続く）

## 第8話 再会

王の腕の中に飛び込まない由奈に、王は不満顔で怒った様にも見える。

そこにいるだけで空気がピリリと引き締まるような、威厳と存在感のある王……。

王のその表情に、由奈は飛び上がってしまいそうなほどの威圧感と緊張感を感じた。

……でも……。

「明日は陛下に劇を披露する日です。最高の劇をお見せしたいのです……。」

今日あなたの腕の中に飛び込んでしまったら……きっと私は、一晩では足りないくらい求めてしまいそうです……だから……。「頬を赤く染めてはにかみながら答えた。

それを聞いて、拍子抜けして嬉しくて頬染める王……。

「良いではないか……。」

「ダメダメ……明後日にして下さい」

「分かった……今度こそ約束を守るのだぞ」

「はい……。」

王が抱き寄せて、優しくふわりとくちづけした……。

由奈は、まるで悪い魔女に魔法をかけられていたのが、王の接吻で魔法を解いてもらったみたいになり、心が燃え上がってしまった。

王の方もまた同じ気持ちであった……。

「やはりもう我慢出来ぬ．．．」

「私も．．．離れたくありません」

激しく燃え上がり．．．何度も愛し合って．．．。

「そなたはそんなに情熱的であつたかな？」  
意地悪な事をわざと言って、由奈を困らす王．．．。

「だから．．．今日はダメって言ったのです。ずっと．．．ずっと．．．  
．．．あなたの胸に抱かれて眠りたいと．．．ずっと．．．」

「愛い奴．．．もう離したくない．．．」

「ダメです．．．あなたに最高の劇を見せたいのですから．．．」  
必死で心を鬼にして、王の腕の中から離れようとしても、又王に引き戻されて、深く愛し合って．．．。  
結局朝を迎えてしまった．．．。

「そろそろアシユが起きます．．．それにもう帰らないと．．．」

「つまらぬ．．．離れとうない．．．」

そう言って抱きしめられて、王の大地のように熱く広い胸に頬をうずめる心地良さ．．．。  
「だけど．．．大切な舞台．．．愛する愛おしい方の為に絶対に成功させたい．．．。」

自分自身にむち打って、やっとのことで身を引き離れた。

「聞き分けて下さいませ．．．」

王も由奈の気持ちは十分分かつている．．．。

王の方も、自分の身を切るような気持ちで由奈から離れた。

「ならば又、今宵も．．．」

「は．．．い」

王はふと昔の事を思いだした．．．。

無理意地して由奈の体調を悪化させてしまった事を．．．。

「体の方はどうなのだ？」

「はい．．．エルラバドスで頂いた新薬はまだ日本では認可されてなくて、あの頃のように本調子とは言えませんが、何とか病気と共存共栄しております」

「そうなのか．．．ならばあまり無理を言ってそなたを困らせるのはやめる事にしよう．．．」

「陛下．．．」

「今宵は無理強いせず、そなたを優しく抱きしめるだけに．．．」

「はい．．．」

由奈は又今宵も王と会う約束をし、アシユを預けて今日の公演会場へと向った．．．。

王に最高の歌を、踊りを、演技をお見せしたい．．．。

結局一晩中愛を確かめ合って夜を明かしてしまい、疲れていそうなのだが全くそんな事は無かった．．．。

王に最高の劇をと思うと．．．自分の中から力が漲ってくる気持ち

だ。

いつも心に引つ掛かってずっと苦しんできた、あの正妻と思っていたジャミール夫人と、王のお子と思っていたサアド王子．．．。それにハレム（今は離宮）の20人の側室は、先王の縁の人々だったとは．．．。

王が一番愛してくださるのは、私と息子だけ．．．。幸せが溢れていた．．．。

折角手に入れた夢を手放さなくてはいけないのは、少し心残りだが．．．  
．．．変わらず自分の事を思い続けて下さった王の為に．．．息子の為に．．．アラブで生きていこう．．．。

父の存在にアシュがあればほど喜ぶとは．．．。

王も、息子の存在に、大変喜んで可愛がってくれて．．．とても嬉しかった．．．。

\* \* \* \* \*

．．．．．劇団 色彩 演劇ホール 『シエヘラザード』

青白い幻想的な月夜の夜．．．。

石作りの館の自室バルコニーで月を見上げるシエヘラザード．．．。  
美しい衣装を身にまとい、柔らかな由奈のソプラノの美しい歌で舞  
台幕が上がった．．．。

シーンと静まり返った広い会場に、由奈の澄んだ歌声が広がり、人々の心を柔らかに優しく包み込む。

アシュラフ王は由奈の美しい歌と、美しい姿に目を輝かせた．．．。

アシユラフ王の膝の上には、アシユがチヨコンと座っていた。

舞台はとても素晴らしく、会場の観客が全員立ち上がり、拍手を贈った。

王も．．．。

最後に王の為にと由奈が歌をプレゼントした．．．。  
それは．．．。

歌劇「ホフマン物語」「生垣には、小鳥たち」の歌．．．。  
あの、バドーニヤ山で由奈が歌った歌。

王と私の思いで深い歌．．．。

会場に由奈の美しい澄んだ歌声が広がった．．．。

王は嬉しい反面、ふと思った。

他の者には聴かせたくない．．．。独り占めしたいようなそんな気持ちだった．．．。

エルラバドスと一緒にもどいたら、余一人だけの為に．．．歌って欲しい．．．。

そして．．．。又毎夜そなたを、抱きしめて眠りに誘われない．．．。  
愛しいユナ。

やっと見付けて手に入れた、余の宝．．．。  
早くエルラバドスに共に行こう．．．。

ふと膝に座っているアシユを見たら、夢の中だった．．．。  
元気に飛び回っている時の瞳は自分に似て、凜とした雄々しい目をしているが、眠ってしまった顔はどこことなく由奈に似ていて、柔らかな優しさが漂っている．．．。

可愛い我が息子．．．。

父としての愛おしさが込み上げてきた．．．。

愛おしい妻と．．．かわいい息子．．．。

由奈と離れ離れになつていた頃は、虚しく心が冷たく孤独だつた．．．。

今は恐いほどの穏やかな幸せな気持ち．．．。

王には恐れる物は無いし、今までは無かつたが．．．。

今は、この愛おしい二人を失う時がもし．．．そう思つたら恐れを感じた．．．。

\* \* \* \* \*

．．．その日の夜、由奈は王の宿泊しているロイヤルスイートルームを訪ねた。

寝てしまったアシユは、王が信頼出来る乳母を急ぎ雇つて、子守をしている。

今日は夜一緒に過ごす約束だったので、身支度をして王の寝室にやつてきた。

「陛下．．．」

「ユナ．．．そなたの舞台は素晴らしかつたぞ．．．」

「光栄でございます。ずっと．．．ずっと．．．会いたくて．．．。

陛下の腕の中で眠りたいと何度も夢に思い描いてまいりました．．．。

きつともうかなわぬ夢と思つていたから、嬉しゅうございます。これは夢ではありませんよね？」

「そなたを激しく抱きしめたいが．．．今日は顔色が良くないよう

だ。

今宵は優しくこの腕に抱きしめるだけにしよう」

「今日はさすがに疲れておりますが．．．あなたに愛されたい．．．」

その言葉に王の目は見開かれて、心が高鳴っている様子が分かった。「ならば硝子細工のように優しく．．．そなたをこの愛で．．．」

「陛下．．．」

「そなたは余の大切な妻だ．．．今宵からは二人の時には名前で呼んでおくれ」

「アシュラフ様」

「様は要らぬ」

「アシュラフ．．．。言い慣れなくて．．．恥ずかしいです．．．」

「ユナ．．．」

「あなたの愛を疑って、手放してしまった時、失った愛の淋しさも、悲しみも、苦しみも、時が優しく癒してくれるだろうと思っておりました。

ですが、時が経てば経つほど会いたさが募って．．．。決して忘れる事などで来ませんでした。

そんな私を癒してくれたのは、息子のアシュでした。

あなたと私の愛の証．．．アシュが居たから今日まで一人で頑張っ

てくれました。

ああ．．．でも、もう一人で頑張らなくてもいいのですね．．．。なんて心強い事でしょう．．．。」

2人目と目を見躲して、愛おしい目で見つめ合った。

「アシユラフ．．．愛おしい人．．．」

「ユナ．．．余の愛おしい宝物．．．」

\* \* \* \* \*

朝、優しく髪を手で梳かれ、ふわっと唇に柔らかな接吻を落とされて、目覚めたユナ．．．。目を開けたら嬉しそうに由奈の顔を覗き込みながら、微笑む王の顔が目の前に現れた。

「恥ずかしいです．．．ずっと見てらっしゃったのですか？」

「ああ．．．凄く疲れてるようだったから、起こさずにずっと眺めていた」

「こうやって朝を迎えるのは初めてでしょうか？」

「宮殿では居室が別だったからな．．．。国に帰ったら、寝屋は一緒の居室に変えるでしょう．．．。由奈の使っていた部屋は、アシユの居室としよう．．．。」

「本当に？ 宜しいのですか？」

「余は王だぞ。元々王妃はハレムで別に住まうのが習わしだった。。  
歴代の王は皆、妃はハレムで過ごすのが慣例で、それが当り前だと思っておったが、余はユナを手元に置きたかったから、宮殿で一緒に住まう様に変えたのじゃ。それでも足らぬ。。。  
余の妻はユナ一人のみ。。ハレムなど要らぬからな。。。戻ったら寝屋は一緒にするでしょう。。。」

「嬉しいです」

「国へはいつ帰る事ができるのじゃ？」

「劇団には退団申請を出してますが、出国の準備やアシユの手続きとか諸々で、1カ月はかかると思います。  
陛下は先に国へお帰り下さい。。あまり国を空けるのは良くないと。。。」

「約束だぞ。必ず戻って来るのだぞ」

「今度は絶対に。。。」

「そなたを信じよう。。。」

「ありがとうございます」

(第9話につづく)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6154t/>

---

アラビアンドリーム～砂漠に咲いた一輪の薔薇～

2011年6月25日01時46分発行